

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號六第 卷二十五第

月六年六十和昭

哀辭 故山本博士遺影及署名

論叢

支那の農家と田賦附加税……………經濟學博士 八木芳之助

佛印幣制論……………經濟學博士 松岡孝兒

企業者労働費論……………經濟學士 大塚一朗

貨幣流通期間と平均生産期間……………經濟學士 青山秀夫

時論

重慶政府の戦時物價政策……………十龜盛次

記事

山本博士逝く

追憶文

神戸 正雄 末廣 重雄 牧野 虎次 中瀬古六郎 本庄榮治郎

谷口 吉彦 松岡 孝兒 大塚 一朗 堀江 保藏 穂積 文雄

高木 眞助 蟻川 虎三 石川 興二 金持 一郎 岡本 清造

附錄

彙報

外國雜誌論題

本誌第五十二卷總目錄

山本先生を憶ふ

穂積文雄

私どもが大學に入つて間もない頃であつたと思ふ。大阪の某大新聞に吾が經濟學部の諸先生の月旦が確か一日一人宛肖像畫まで入れて連載せられた事がある。その時、山本先生に就いては、先生が教室で笑はれたら學生は下宿で鯛がつくと噂してゐる、とひやかしたり、あまりばつとせぬ植民政策の講義を一つ趣向を變へてマルクスの立場から論じて見ては如何、と野次つたりしてあつた。すると先生は次の講義の時間にこれに對して非常な立腹で種々と辯難せられた。當時、私は先生を小さいなと感じたものである。

二回生の時であつたか、同好會大會に先生を學部長として御迎へしたことがあつた。先生は上氣嫌で終始にこ／＼として居られた。誰だつたか先生のロマンスを聽かせて下さいとねだるの不遜を冒したのに對してさへ、矢張り微笑を斷たれることなく、圓山公園あた

りを行くとアヴェツクの諸君に會つて却つてあてられること屢々である、寧ろ諸君に聴きたいところだ、と巧にかはされるのであつた。其時、私は先生も甘いなと思つたものである。

學校を出て十五年になる。その間種々の人を見た。

嬉しくても嬉しい様子を見せまいとする人、腹で怒つて顔は笑ふ人、等々。思へばポーズをとる人の如何に多い事よ。今にして、腹が立てば怒り、嬉しければ微笑まれる先生の好さが漸くわかり、慕はしさを切に感ずる時、先生の流焉たる御逝去に遭ふ。淋しいかぎりである。嗚呼。(昭和十六年五月二十日)